

減災新聞

第725号

関東大震災から100年以上が経過し、次の大規模地震が警戒されています。気象災害のリスクは日常化し、火山噴火も懸念されています。毎月第1・3日曜の「減災新聞」では、多様な視点で備えの在り方を探ります。情報はメール(gensai@kanagawa-np.co.jp)でお寄せください。

と呼びかけている。
県内では既にゲリラ雷雨が繰り返し発生している。7月25日は午後に関内各地で雨雲が発達し、激しい雷雨に見舞われた。南足柄市や清川村に設置された雨量計で1時間に40mmを超える激しい雨を観測。JR御殿場線が一部区間で運休するなどの影響も出た。
26日も相模原市や川崎市などで局地的に激しい雨が降り、気象庁は竜巻注意に関する気象防災速報を繰り返し出した。

水害写真「捨てないで」

川崎拠点の団体、修復続け

川崎市を拠点とする災害ボランティア団体「多摩川災害支援チーム（チームたま）」が7月に豪雨災害に見舞われた栃木県足利市の被災写真を見直し、修復する作業を始めた。床上浸水した住宅で水に漬かったアルバムを乾かし、一枚一枚丁寧に洗浄、消毒した上で被災者に返却する。地道な活動だが、数々の写真を「復活」させてきたメンバーは写真には大切な思い出が詰まっている。被災しても諦めず、捨てないで」と呼びかけている。

（渡辺 渉）

「元の状態に戻せるわけでもないが、まずはカビなどの繁殖を防ぎ、劣化を食い止めた。今後、作業を続けていかねければ」

26日、川崎市総合福祉センター（同市中原区）のボランティア交流室。チームたま代表の金高るりさん（45）がかみ



中高生らと一緒に被災写真の修復に当たる赤松さん（左端）と代表の金高さん（左から2人目）ら
＝7月26日、川崎市総合福祉センター

腐食で画像の一部が欠落したり、変色したりした写真も少なくない。

その一枚一枚を泥水に漬かったアルバムなどから丁寧に取り出し、水とスポンジで洗浄。牛乳パックなどを加工した写真立てで乾燥させ、アルコール消毒する作業に手分けして取り組んだ。

写真の持ち主の自宅は、足利市を襲った7月17・18日の記録的な大雨で床上浸水となった。

「夜中に水が一気に入ってきたらしく、床上40センチくらいまで浸水していた。床板をはがしたり、ぬれた家具を運び出したりするボランティア活動の際にアルバムを見つけた。チームたまのメンバー

赤松裕介さん（59）が支援に向かったことが、写真修復のきっかけになった。室内にもカビが出始める中、「被災した家人にとっては家財などの搬出が優先。写真は捨てても構わない」という意向だったが、その場ですぐに乾燥させ、預かることにした」という。

この日の作業には、写真修復のボランティア活動を初めて経験する中高生らも加わった。その1人、大学4年の安倍美咲さん（21）は「写真の修復は見落とされがちなことかもしれないけれど、とても大

アルバムなどから一枚一枚丁寧に取り出された被災写真。乾燥は重要な工程という



切。今後は他のボランティアも経験してみたい」と意識を高めていた。

チームたまは2019年10月の台風19号（東日本台風）を機に発足。同台風で氾濫が

猛烈な雨で氾濫

住宅浸水相次ぐ

足利、7月最多

で夕方から夜にかけて一気に雨量が増えた」としている。気象台によると、湿った空気や日中の気温上昇で大気の状態が不安定になったのが大雨の原因。足利市では17、18日の総雨量が平年の7月1カ月分（167.5mm）の1.4倍となる237.5mmに達した。このうち226.5mmが17日に降り、一日当たりの降水量は7月の観測史上最多を記録。午後6時ごろまでの1時間に67.5mmの非常に激しい雨を観測した。

（渡辺 渉）

広範囲に及んだ多摩川流域で浸水住宅の床下清掃などに取り組み、被災した写真の修復にも徐々に力を入れるようになった。最近と同様の活動を担う県外のグループとも連携し、遠方の被災地から預かった写真も修復している。

金高さんは「被災直後は写真にまで意識が向かないと思うが、生活が落ち着いてきた時に写真で後悔することがないようになりたい」と活動の意義を強調。「ぬれた写真でも捨てる必要はない。そして支援する人がいるということを知ってほしい」と話している。今後、参加を募りながら、作業を続ける。